

松本清張記念館

◆館報◆
2008.1
第26号

朕は汝等軍人の 大元帥なるぞ



「象徴の設計」

昭和51(1976)年11月刊行 文藝春秋

「象徴の設計」は、昭和37年3月から翌38年6月まで、「文芸」に連載された。

目次

- 開館九周年記念講演会
筒井康隆講演会……………2
- 企画展紹介
「松本清張と松川事件」……………6

- 清張原風景「点描」……………6
- 展示品紹介……………7
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

作品紹介

明治十一年八月二十三日、給料の減額と西南戦争の恩賞遅延を不満として、近衛砲兵が暴動を起こした。世にいう「竹橋騒動」である。

暴動は一夜にして治まったが、陸軍卿山県有朋はこの事件で軍隊の欠点を痛感する。外形は出来たが、内部の精神が固まっておらず。そこで、忠実、勇敢、服従を軍人精神の三大要素とし、軍秩の厳守を説き、軍人が政治に関わることを厳禁した「軍人訓誡」を急遽頒布する。しかし、兵卒の、天皇への忠義心は未だ薄く、彼らにどのような精神的支柱を与えるか、山県は見当がつかずにいた。

山県が一番怖れたのは、軍隊の中に自由民権運動が浸透することで、兵制が破綻し軍隊自体が内部崩壊することであった。それを防ぐには、早急に兵士の頂上に立つ精神的な象徴を作らねばと考える。フランスではそれは「神」であった。日本においては——天皇を軍隊の直接上官の形にしその最極限に置き、その人格を神にまで高めればどうか。山県は眼から鱗が落ちたような心地がした。

明治十五年一月四日、「軍人訓誡」の弱点を更正して絶対制秩序の形成を目ざした「軍人勅諭」が下された。天皇に対する忠義という一点に向かって、あらゆる徳目が集中されていた。《上官の命を承ること実は直に朕(天皇)が命を承る義なりと心得よ》命令の絶対性から絶対服従が強調される。《朕は汝等軍人の大元帥なるぞされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき》天皇が自ら軍隊の元首となることで、軍隊は天皇に直結し、天皇は軍隊を私兵的に直接指揮する。統帥権の発生である。

天皇は大元帥という超越的象徴として神格化された。山県有朋はこの象徴を要に据え、日本軍隊、ひいては明治国家を設計し構築していった。

(学芸担当 中川 里志)